

LAZONA ラゾーナ

藤尾歴史散歩

藤尾学区まちづくり協議会歴史文化部会



第13回 大津絵（追分絵・大谷絵）

「大津絵の筆のはじめは何仏」（松尾芭蕉）
元禄4年（1691年）正月4日、粟津の無名庵（義仲寺）で詠まれたこの句から、大津絵と呼ばれるようになりました。それまでは追分絵・大谷絵と云われていました。

徳川家康が東本願寺を再建したとき、仏師・仏画師を追分や大谷に移住させましたが、その仏画師たちが描いたのが追分絵や大谷絵で、大津絵の始まりです。大津絵は1630年ごろにはじまり、仏画をもとにして街道に生まれた民画でした。しかし、江戸時代には切支丹信者ではないという証として、この仏画を民衆がもとめるようになり、また、「柱絵」という名が残っているとおり、柱やふすま、壁に貼って信仰の対象ともされました。その後、世俗画へと形をかえ街道筋の民画・お土産品として親しまれました。

速筆で大津絵五色と言われる独特の色の調和、そして浮世絵とともに日本の二大民画の一つとして親しまれてきたのです。

（文・松井佐彦）



- 伊勢参宮名所図絵・追分（江戸時代）
「この追分より大津領にて町つづきなり。針・算盤・大津絵などの店多し」の文字が読みとれる。

図絵にも描かれた、藤尾追分のにぎわいと大津絵



- 京阪京津線追分駅（浜大津方面）のホームに掲げられている大津絵。大谷駅にもあります。

余話

信仰の対象となる仏を描いた画、日常を描く風俗画やユーモアあふれる戯画などの要素を取り入れたアートな大津絵は浮世絵が圧倒的存在感を放つ江戸時代の中でも西洋の人々からは大人気でした。ドイツ人医師のシーボルトは江戸に向かう為旧東海道を通ったそうで、オランダ語で『Ootsue』と書かれたメモが彼のガイドブックの大津のページに残されています。また明治時代にはアメリカ人美術史家のフェノロサ、大正時代にはスペイン人画家のピカソも大津絵を所蔵したそうです。2019年にはヨーロッパ初となる大規模な大津絵展がパリ日本文化会館において開かれるなど、大谷町や追分町で発祥した大津絵は世界においても日本の代表的な民画とされています。（歴史文化部会）

バックナンバーご希望の方は市民センターまで

